思い出の桜

MUKKU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出の桜

【Ｎコード】

Ｎ９４９１Ｈ

【作者名】

ＭＵＫＫＵ

【あらすじ】

和葉への気持ちに気付いていない平次に蘭と青子は新一と快斗を巻き込んである計画をする「破れない約束」の続きですが、独立した話なので、読んでいなくても大丈夫です。

第1章　ポアロでの会話（前書き）

第2作目です。
相変わらずの駄文です。

第1章　ポアロでの会話

４月になってすぐの昼下がり、新一、蘭、快斗、青子は喫茶ポアロにいた。
この４人は、組織の壊滅後よく会うようになっていた。
新一と快斗はホームズとルパン、どっちが凄いか討論していたが、既に言い争いと化していた。
そんな、言い争いをしている彼氏達をよそに、青子は蘭に、
「そういえば、和葉ちゃんと服部君って付き合ってるの？」
と聞いた。
本当は本人に聞けば手っ取り早いのたが、その２人は大阪にいてあまり会えないから、青子よりも和葉達の事を良く知っている蘭に聞いたのだ。
「ううん、まだ付き合ってないと思うよ。少し前の私と新一や青子ちゃんと黒羽君みたいな感じかな」
「へぇー」
蘭や青子達も今では、新一と蘭、快斗と青子は付き合っているが、１ヶ月前は、周りにただの幼なじみと言い張っていたのだ。
そのうち、２人は和葉と平次の話でだんだんヒートアップしてきた。
蘭は昔あった事を青子に話した。
「…でね、服部君酷いんだよ！！和葉ちゃんが他の男の人と一緒にいるとイライラするって言って和葉ちゃんと期待してたら、服部君…和葉ちゃんの事子分だと思っているから、他の男の人と一緒にいると子分を取られると思うからイライラしたんだって結論だしたんだよ！！」
「えー！！和葉ちゃん可哀想…そうだ！！青子達で服部君に和葉ちゃんへの気持ち気付かせてあげよう！！」

青子の勢いに蘭は驚きながら、
「でもどうするの？」
と聞いた。
　すると青子は自信満々に、
「大丈夫！！こっちには、平成のアルセーヌ・ルパンと平成のシャーロック・ホームズがいるんだから！！」
と言った。
　当の本人達も自分達の肩書きを急に呼ばれて言い争いを止めた。
　蘭も賛成して、
「新一も黒羽君もいいよね？」
と2人に聞いた。
　しかし、話の内容が分かっていない2人は、
「何が？」と聞く事しかできなかった。

　蘭と青子は新一と快斗に計画を話した。
　計画といっても具体的に何をするかは全く決まっていないのだが…。
「…で、その作戦を作るのに俺達の力を借りたいって事か…」
新一は半ば呆れぎみに言った。
「そう！！新一も協力してくれるよね！！」
蘭は新一に笑顔を向けて言った。
　この計画に快斗は、
「面白そう！！やるやる！！」
と乗り気だったが、新一は、
「俺は反対だな…それは、服部が自分で解決しないと意味が無いだろうし…」
と言った。
　それを聞いた蘭は悲しそうに、

「ダメ…かな？…」
と上目づかいで言った。
「うっ…分かったよ…」
新一は蘭のこの表情に弱いのだ。
　新一が折れると蘭はさっきの悲しそうな顔から一瞬で嬉しそうな顔になって、
「ヤッター！！」
と言って、青子と楽しそうに話し始めた。
　その時新一は、確信犯なのではないかと蘭を一瞬疑った。

こうして、４人の
『服部＆和葉ちゃんラブラブ大作戦（快斗命名）』
が幕を開けた。

第2章　計画（前書き）

哀を出したかったので、ここで出しました。「思い出の桜」ではもう出てこないと思います。

第2章　計画

「で、どんな作戦にするの？」
蘭は青子に聞いた。
「う～ん…2人の思い出を再現できたりすればいいんだけどな…蘭ちゃん、和葉ちゃんから聞いてない？思い出の場所とか…」
「う～ん…あんまりそういう事和葉ちゃんから聞いてないな…小さい頃、手錠で遊んでたら取れなくなっちゃったって事くらいしか…」
と蘭が思い出した事を言うと、快斗が、
「それじゃ、ダメだろ…今の2人を手錠で繋ぐ訳にはいかねえし…」
と言った。
「だよね…じゃあ他に何があるかな？」
と蘭が悩んでいると、新一が、
「俺、服部の和葉ちゃんに関する思い出の場所知ってるぜ…」
と言った。
「えー！！服部君、新一に思い出話とかするのー！？で、どこどこ！？」
と、興奮気味に聞く蘭と他2名に新一は、平次の和葉との思い出の場所についてのエピソードと場所を話した。
　すると、蘭達3人は全員賛成した。

　4人が具体的な計画で話し合っている時、
「あら…同じ顔が二組並んでいるわね…」
というクールな声が聞こえた。
「哀ちゃん！！久しぶり！どうしたの！？」
と蘭が聞いた。
「ちょっと、工藤君と蘭さんに用があってね…何これ？…『服部&

和葉ちゃんラブラブ大作戦』…誰がこんな名前つけたの？…」
哀が計画を書いたノートを見て呆れながら言った。
「あぁ…黒羽だ」
新一もこの名前に呆れているようだ。
「そう…いいセンスしているわね…全く…黒羽君は白い泥棒さんの時とのギャップが大きいわね…」
哀が皮肉って言った。
　すると快斗は、キッドの口調で、
「そうした方が正体がバレにくいのですよ。お嬢さん」
と言った。
「・・・・・」
快斗のキザなセリフは哀に黙殺されてしまった。
「そうだ！！哀ちゃんも手伝ってくれない？哀ちゃんいると心強いし！！」
と青子が目をキラキラさせて言った。
　しかし哀は、
「ごめんなさいね…面白そうだけど辞めとくわ…今度吉田さん達とキャンプに行くんたけど…今、その計画で忙しいし…吉田さんが工藤君と蘭さんを呼びたいって言ってたから大丈夫か聞きにきたけど…その様子じゃ無理のようね…」
と言って、哀はポアロの出口に向かった。
「ゴメンね哀ちゃん…歩美ちゃん達にもゴメンって言っといて」
と蘭が謝ると哀は、
「いいわよ…それより工藤君、たまには吉田さん達と遊んであげなさいよ…あの子達あなたが元に戻ってからもあなたと遊ぶの楽しみにしてるんだから…」
と言って哀はポアロから出て行った。

1時間後、『服部&和葉ちゃんラブラブ大作戦』の計画が出来上がった。
「じゃあ、明日は準備だ！！みんな遅れるなよ！！」
この時、最初乗り気じゃなかった新一が何故か張り切って、3人を仕切っていた。

第3章　準備（前書き）

やっぱり関西弁が上手くできませんご了承ください。
平次の思い出の場所は読めばすぐ分かる人も多いでしょうね。

第3章　準備

次の日、４人は新一の家で、準備をしていた。
まず、どのコースでならちょうどいい時間になるのかを新一が計算しながら決めた。
「そういえば、新一、どうやって平次を和葉ちゃんと一緒に連れ出すんだ？」
快斗が思い出したように聞いた。
「まあ、俺に調査の依頼が来たって事にしとけばいいだろ…あっちの地理は服部の方が詳しいから、調査の手伝いと道案内してくれって言えば来るだろうし、蘭達連れてくから和葉ちゃんも呼んでくれって言っても不自然じゃねーしな…」
と新一が言った時、
「快斗も新一君も話してないで手伝ってよ～！！」
と青子に注意されてしまった。
コースを決めた後、平次達に怪しまれないためのセリフを書いた台本を作る事にした。
４人は基本的な話の流れを決めた。
また、細かいセリフについては演技で人を騙す事に慣れている快斗に任せて、残りの３人は作戦に必要な暗号を考えていた。

３時間後、その２つも完成し、新一は平次と和葉を目的の場所に呼ぶために平次に電話した。
「もしもし、久しぶりだな服部」
『久しぶりやな工藤！！けど珍しいなお前が俺に電話してくるなんて…ほんで、どんな要件や？』
平次は珍しく新一から電話が来たので嬉しそうだ。

「あぁ…捜査の依頼で京都に行くんたけど、あっちの地理はわかんねーから捜査の手伝いと道案内してくれねーかと思って…」
『そうか！！俺と工藤が揃ったら解けへん謎はあらへんからな！でいつ来るんや？』
「あぁ、今週中で明後日より後ならいつでもいいぜ！あっ！！あと和葉ちゃんも連れて来てくれよ」
『ハァ？何でアイツと一緒に行かなあかんねん？』
「あぁ、蘭や青子ちゃんや黒羽も一緒に来るんだけどな…蘭と青子ちゃんが『和葉ちゃんに会いたい』って言ってるんだよ」
『そうか…じゃあ和葉にも聞いとくわ、じゃあ工藤、また後で連絡するからな』
「あぁ、じゃあな！」
新一が電話を切った後、快斗が、
「流石新一！！嘘がうまい！！まあずっと蘭ちゃんを騙し続けていただけあるな！！」
と面白がって言うと、
「うるせー！！お前だって青子ちゃんを騙し続けていただろ！！」
と結局痛み分けになったのであった。
　そんな2人を見ていた嘘をつかれていた被害者の2人はため息をつきながらその話を聞いていた。

第４章　ハイテンションな助っ人（前書き）

第３章でセリフがタブっててすみませんでした。
もう修正してあります。

第４章　ハイテンションな助っ人

「さて、台本は出来たけど問題はセリフをうまく言えるかだな…」
新一は少し心配そうに言い、快斗も
「そうだな…俺と新一は大丈夫だとして、青子と蘭ちゃんは心配だな…」
と新一に同意した。
「ちょっと快斗！！何で心配なのは青子と蘭ちゃんだけなの！？」
快斗の言葉に反論した青子だったが、蘭に、
「しょうがないよ…新一はお父さんを眠らせて推理してる時の口調はお父さんそっくりだったし…黒羽君は怪盗キッドだったんだから演技凄く上手いけど、私達にはそういうの無いから…」
と宥められていた。
　すると、新一が思い出したように、
「そういえば、演技のコーチとして助っ人呼んどいたぜ…その人今回の作戦みたいな事好きだからすぐ戻って来るってさ」
と言った。
　蘭は新一が言っている人物が分かった気がして、
「えっ…新一それって…」
と言いかけた時、

ピーンポーン

とチャイムの音がして、
「ただいまー！！」
と、ハイテンションな声と共に新一の母、工藤有希子が入ってきた。
「新ちゃん！！蘭ちゃん！！久しぶり！！後、快斗君も久しぶりね、覚えてる？で、あなたが青子ちゃんね、初めまして！！」
新一達４人は有希子のテンションに圧倒されていたが、その内、

「ハァ？何で黒羽と母さんが知り合いなんだよ！？」
と、最初に我に返った新一の声で皆我に返った。
新一の質問に快斗は、
「覚えてない…」
と言った。
代わりに有希子が、
「昔、女優の役作りの為にマジシャンに弟子入りしたって言ったでしょ？そのマジシャンっていうのが快斗君のお父さん、黒羽盗一さんなのよ！！快斗君には、盗一さんに会った時に一度会った事があるのよ。確か…快斗君小学校1年生だったかな？新ちゃんと同い年だし」
と新一に説明した。
その説明を聞いて快斗は思い出した様子だった。
しかし、有希子の事を知らない青子は、蘭に、
「ねえ…蘭ちゃん…新一君のお母さんって何者？」
と聞いた。
その問いに蘭は笑顔で、
「あぁ、新一のお母さんは昔、凄く有名な女優だったの。藤峰有希子って言えば、当時知らない人はいなかったんじゃない？」
と答えた。
蘭の言葉に、
「藤峰有希子…聞いたことある！！凄いね、新一君…快斗から聞いたんだけと、お父さんも世界有数の推理小説家なんでしょ？」
と青子は感心しながら答えた。
蘭と青子が話している時、有希子は、
「さ～て4人とも覚悟してね～！！私がみっちりしごいてあげるんだから！！」
とハイテンションで言っていた。
こうして、蘭と青子だけでなく、何故か、新一や快斗までみっちりしごかれていた。

数時間後、
「さ～て、もう遅いし、続きは明日にしようか！！」
と有希子が言った頃には４人とも疲れてぐったりしていた。
そんな時、　新一の携帯が鳴った。
「もしもし…」
新一が電話に出ると、
『おっ！工藤！！なんか声が疲れているで…』
という平次の声がした。
「まあ…いろいろあってな…で、いついいんだ？」
『あぁ、和葉と話したんやけど善は急げっちゅう事で明後日がいいんやけど…』
「あぁ、明後日か…いいよなみんな！！」
と、蘭達３人に聞くと、全員ＯＫした。
「全員ＯＫだぜ服部」
『なんや、そこに皆おるんか…連絡する手間はぶけて良かったな…ほなさいなら』
と言って、平次は電話を切った。
「明後日か…じゃあ練習は明日しかできないのね…みんな！！頑張るわよ！！」
電話が終わった後有希子が叫んだ。

次の日４人が前日以上にしごかれたのは言うまでもない。

第5章　自分勝手な名探偵！？（前書き）

サブタイトルが変です…。

第5章　自分勝手な名探偵！？

『服部&和葉ちゃんラブラブ大作戦』実行当日、新一達は朝の11時半頃に京都駅に着いた。
5分程して、平次と和葉が平次のバイクでやって来た。
「蘭ちゃーん！！青子ちゃーん！！久しぶりやな」
「1ヶ月くらいぶりね」
「青子、和葉ちゃんに会うの楽しみにしてたよ！！」
と女子が楽しそうに話している中、
「で、工藤、暗号ってどんなんや？」
と平次が聞いた。
「あぁこれだ…」
新一は白い封筒を平次に渡した。
平次は封筒の中に入っている1枚の紙を見た。その紙には、
『僧　猿　豚　「　」』
とワープロで書いてあった。
「工藤…まさかこれって？」
「お前も、鍵かっこの中に何が入るかはすぐ分かるよな…」
「あぁ…でもそれが何を意味するかはさっぱり分からん…」と、言って平次は暗号について真剣に考えていた。

すると、急に新一が、
「ハッ、アホらし…服部、後はお前に任せた！！…蘭！せっかく京都に来たんだから観光しようぜ！！」
「えっ！？新一暗号は？」
「いいから、いいから」
と言って、蘭と一緒に観光に行ってしまった。
「オイ！！アホ！！待て工藤！！」
と叫んだ平次であったが新一の耳には届かなかったらしい。

「…なんや…アイツ…もしかして、最初から暗号は俺に任せてあのネーチャンと観光する目的で俺を呼んだんちゃうやろうな…」と平次は見えなくなってしまった新一が消えて行った方向を見ながら呟いた。
「…まさか…」
と快斗はフォローしたが、平次の新一に対する疑いは晴れなかった。
平次が新一を疑っているなか、快斗は
「平次、俺も京都で行かないといけねー用事あるから、後は任せたぜ！！」
と平次の背中を叩きながら言って、その場を離れようとした。
すると、平次が、とても疑わしそうな顔で、
「まさか…自分…キッドの仕事の下見のために別行動する訳ちゃうよな…」
と聞いた。
その問いに快斗は
「まさか」
と笑いながら言って去って行った。
さらに、青子が、
「じゃあ、暗号は平次君に任せて、青子達は京都で観光しよう！！和葉ちゃん案内して～」
と和葉に頼んでいた。
和葉は快く、
「ええよ！！ほな行こう青子ちゃん！！」
と答えて、
「ほな、平次頑張り～！！」
と言って青子と一緒に京都巡りに行ってしまった。
こうして平次は6人からいっきに1人での捜査になってしまった。
イライラが最高潮に達した平次は、
「…なんやアイツ等、人を呼び出しといて、置いてけぼりかい！！

あかん…無性に腹が立ってきた…こら、後で工藤と黒羽を竹刀でしばかん事には気ぃおさまらん！！こうなったら早めに暗号解いて、あの２人をしばいたる！！！」
と叫んだ。
　その声の大きさと物騒なセリフで、平次は周りにいた人々に危険な人物と認識され、平次の周り半径５ｍに人がいなくなったのは言うまでもない。

第6章　幼稚な暗号（前書き）

いい暗号が浮かばなくて変な暗号になってしまいました。
意味不明な点もあるかも知れませんがご了承下さい。
相変わらず関西弁が変です。

第6章　幼稚な暗号

一人で暗号を解く事になった平次は、ベンチに座って、暗号を睨んでいた。
（『僧　猿　豚　「　」』の鍵かっこん中は西遊記で僧が三蔵法師で、猿が孫悟空、豚が猪八戒やから、沙悟浄で河童や…けど河童が何やねん？）
平次は意外と暗号に苦戦していた。
（そういえば、孫悟空って、名字が孫で名前が悟空で、悟空って言う事もあるんやな…同じように沙悟浄は…悟浄…ごじょう…五条…まさか…五条通り？…んなアホな…まあ行ってみない事には何も始まらんし…ほな行くか！！）
と平次はとりあえず自分がたどり着いた答えの場所へ行く事にした。

平次は五条通りに着いてから、あることに気付いた。
「って…五条通りのどこやねん！！」
今平次が解いた暗号では五条通りのどこか分からないのだ。
（もしかして…鍵かっこん中に河童が入る事自体間違えてるんちゃうか？…確か…沙悟浄は元々、川ん中にいる妖怪として出てきたんや。それを日本で日本におる川の妖怪である河童にしたから日本では河童になっとるんや…つまり、鍵かっこが意味しとるのは「川」この五条通りで川言うたら五条大橋やな…まあ暗号が幼稚やけど、行ってみる価値ありやな）
と平次は五条大橋へ向かった。

（で…五条大橋に来たんやけど…何があるか分からないので橋を渡ってみることにした。　すると、橋の真ん中辺りの欄干に欄干と同じ模様でカモフラージュされた紙が貼ってあり隅が少し捲れていた。

平次は、

「なるほど…次の暗号って訳やな…暗号が幼稚なクセに手のこった事しよって…」

と呟きながら、紙を捲った。　するとその紙には、

『陰陰陰陰陰陰陰陰陰陰陰陰，陽陽陽陽陽陽陽陽陽陽陽陽陽陽陽陽陽陽陽陽陽陽

南瓜

塔の入り口にある』

と書かれていた。

「何やこれ…陰陽師かぃ！！…陰陽師に南瓜と塔ってパッとせんな…ってか『陰』と『陽』の字多すぎや！こんなあったら目ぇ痛おなってしゃあないわ…いくつあるんや！？」

これが暗号を見た平次の感想である。

とりあえず平次は『陰』と『陽』の字の数を数えてみることにした。

（…『陰』が１２で『陽』が２２か…いったい何の意味があるんや？…まてよ…陰陽師で陰と陽が意味するものは…それに南瓜…もしかして…あの日の事か？…でも、それだとしてもどこ行ったらいいか…そういえば…五条は洒落やったな…これも洒落にすると…！！なる程あそこやな！！そこにはちょうどええ塔もあるし！！）

と平次は考えて、バイクに乗り込んだ。

第7章　陰陽師と尺（前書き）

相変わらず無理やりな暗号ですみません…
サブタイトルはいいのが浮かばなかったのであんなんになってしまいました。

第7章　陰陽師と尺

平次はバイクを飛ばして、
（あの暗号の陰と陽は陰陽師同様、陰は月、陽は太陽を表しとんのや！！それに南瓜はヒントやったんや！月が１２で太陽が２２…つまり、１２月２２日で南瓜が関係するんは…冬至や！！それをさっきの五条同様に洒落にすれば…冬至…とうじ…東寺って事や！！あっこにはでっかい五重塔があるから間違いあらへん！！）
と考えながら東寺へ向かった。

東寺に着いた平次は真っ先に五重塔に向かった。
（まさか…さっきみたいに次の暗号が貼られてたとしても、ホンマに五重塔に紙が貼られてる訳あらへんな…）
と思いながら、暗号が指している物を探したが、本当に五重塔の入り口に貼ってあった。
それを見つけた平次は、
「…ホンマに貼ってあった…けどこれ貼った奴ホンマ罰当たりな奴やな…」
と言いながら紙を剥がした。

一方、もう一人のターゲットの和葉は親戚の家で青子とあんみつを食べていた。
「ホント和葉ちゃんのおばさんの作ったあんみつ美味しいね！青子こんなに美味しいあんみつ食べたの初めて！！」
「そやろ！！オバチャンのあんみつは天下一品でそこらの店より美

味しいんやで！」
どうやら青子も作戦の事を忘れているらしい。
こうして2人はしばらくあんみつを食べながら和葉の親戚の家で談笑していた。

和葉と青子が和葉の親戚の家を去ってから2時間程経った頃、平次は既に幾つかの暗号を解いていた。
そして、今悩んでいる暗号は、
『大和の“約５９．４ｍ”
風の前にある』
という暗号だった。
（…大和の“約５９．４ｍ”…の意味が分からん…それに風の前って何のこっちゃ？）
平次はここまで考えてある事に気付いた。
（まてよ…大和のって事はｍを日本古来の単位にするっつう事ちゃうか？…って事は５９．４ｍを尺に直すとだいたい１９８尺や…って訳分からんやないか！…イヤ…尺の次の単位は…丈やけどそれなら６０．６ｍにした方が区切りええしな…そういえば間っつう単位あったな…確か1間は6尺や…１９８尺を6で割ると…３３間…まさか…三十三間堂やないか？…あっこは千手観音を祀っとるし、当然千手観音の守護神の風神雷神のもある…つまり風の前は風神像の前って事や！！…まあ風神の前のどこにあるかは分からんけど…そんなん行けば解るやろ…ってか、相変わらず幼稚な暗号やな…）
平次はそう考えて、バイクに乗り込み、三十三間堂へ向かった。

第8章　二組の電話（前書き）

前回の奴、暗号のネタが浮かばなくて、時間を飛ばしてしまいました。
力不足ですみません…
今回のサブタイトルも微妙です。

第8章　二組の電話

平次は三十三間堂の風神像の前にたどり着いた。
　しかし、暗号の紙が貼ってある様子が無かった。
「…無いやんけ…暗号の目的はここやったんか？…」
と言って、暗号の紙以外に何かあるだろうと、探そうとした時、前解いた暗号の紙が落ちてしまった。
　平次がそれを拾った時、自分の足元が捲れているのに気付いた。
「…何や…床に貼ってあったんか…分かりずらいなぁ…」
と呟いて紙を剥がした。
　この紙には、『日吉大社の寺

桜の木』

とあった。
「…日吉大社って…滋賀県やないか！！…てか、この暗号…神社なんか寺なんかよう分からんな…」と言った。
　平次はしばらく、この暗号について考えていた。
「コラ、今日一番の暗号やないか…」
と呟いた時、　ここは普段、三十三間堂という通称で呼ばれているが、本当は蓮華王院という名の寺だという事を思い出した。（まてよ…日吉大社にも通称か異称ってあらへんか？…確か…山王…やったな…山王…さんのう…山能…！！山能寺や！！あっこにはあの桜があるんや！！…けどここから山能寺って京都の街の中でもチイと遠いな…」
暗号が解けた平次に9年前のあの日の出来事が浮かんだ。

その頃、和葉と青子は、和葉の親戚の家で借りた着物を着て京都の街を歩いていた。　和葉の着ている着物は赤い着物で、青子は水色の着物だ。「ほな次どこ行く？」
「うーん…せっかく…桜が綺麗なんだし…桜が綺麗な所とかがいいんじゃない？」
「それなら山能寺がいいんちゃう？あっこの桜はめっちゃ綺麗やしここから近いんやで！！」
「いいね！！行こ行こ！！」
と2人で話していると、和葉の携帯が鳴った。
「…平次からや…青子ちゃんゴメンちょっと待っといて……もしもし…平次？なんかあったん？」
『イヤ…なあ和葉、15分後に山能寺に来てくれんか？』
「ええよ！！ちょうど青子ちゃんと今から行くところやったし、5分くらいで着くんちゃう？」
『イヤ…15分後にしてくれんか？』
「なんでなん？」
『なんでもや！！中森のネーチャンには悪いけどそれまで待ってもらっとけ…じゃ、切るで』
「あっ！ちょい！平次！！…アカン切れてもうた…」
「平次君何だって？」
「山能寺に行くのを15分後にしてくれやって…自分かってな男やな…」
「そんなこと無いよ…」
青子が平次をフォローした時、今度は青子の携帯が鳴った。
「あっ！快斗からだ……もしもし快斗どうしたの？…うん…うん…分かった！！じゃあね～！！」
青子は電話を切って、和葉の方を振り返って、
「和葉ちゃんゴメ～ン！！快斗が今すぐ来てくれって言うから行ってくるね…じゃあ桜はまた今度、蘭ちゃん達がいるときにね…」
と申し訳なさそうに言った。

「…うん…私は平次が言う時間までブラブラしとるわ」
「和葉ちゃん…本当にゴメンね〜！！」
と青子は本当に申し訳なさそうに去って行った。

第9章　桜舞う告白（前書き）

そろそろクライマックスです！！

第9章　桜舞う告白

平次は山能寺の近くの駐車場にバイクを止めて、山能寺に入ろうとした時、３０歳位の男とぶつかった。
平次はぶつかった時に落ちた自分の携帯を拾って、
「悪いなニイチャン！！」
と謝ったが、男は無愛想に去って行った。
「何や…アイツ…」
と、平次は呟いて山能寺へ入って行った。

「…って…何にも無いやんか！！」
数分後、山能寺の桜の木の前に来た平次だったが、そこには何も無く、思わず叫んでしまったのだ。　すると後ろから、
「何が無いん？」
という声がして、振り向くと、和葉が立っていた。
「か…和葉！？どうしたんやその格好！？ってか何でここにおるんや！？」
と平次は驚いて聞いた。
「あぁ、着物はオバチャンに借りたんや！！青子ちゃんも可愛い水色の着物着てるんやで！！…って…何でここにおるかなんて、平次がここ来いって言ったんやん！！」
和葉は少しイラついて答えた。
「…俺…呼んどらんぞ…」
「ハァ？何言うとんの？着信履歴にもちゃんと残っとるんやで！！」
と和葉は携帯を出して言った。
「…ホンマや…俺の履歴にも残っとる…けど何でや？」
平次は訳も分からない様子だ。
「…平次…どっかで頭かどっか打った…」

和葉はここまで言って、足元に鞠が転がっているのに気付いた。
「鞠や…懐かしいな…私昔ここで着物着て鞠つきしながら手鞠歌を歌ったんやで、あん時の私むっちゃ綺麗やったんやで！！平次にも見せたかったのに平次どっか行ってもうたから見せれなかったんやけどな…」
と言ってから鞠つきを始めた。
「まるたけえびすに　おしおいけ　よめさんろっかく…」
ここまで歌った時平次に、
「アホ！！『よめさん』やのうて『あねさん』や！！」
とツッコミをいれられた。
　それに対して和葉は、
「ええやんそないな細かい事…細かい事ウジウジ言う男は嫌われるで」
と言った。
　すると平次は、
「まあ、そのおかげで初恋の人が分かったんやけどな…」
と呟いた。
「…えっ？」
平次の呟きを和葉は聞き逃さなかった。
「平次の初恋って京都に居てる少し年上の人？」
と和葉が聞くと、平次は困ったように、
「まあ…半分当たりで半分ハズレやな…」
と答えた。
「何なのそれ？…」
変な事を言う平次に和葉は怪訝な顔で聞いた。
「まあ…お前に話してもいいな…俺の初恋の人はなぁ…少し化粧してたから年上に見えたんやけど同い年や…それに、その子はさっきお前が歌ってた手鞠歌を歌ってたんやけど、『あねさんろっかく』を『よめさんろっかく』って歌っていたアホなんや…」
ここまで言った時、平次の顔が赤くなった。

「それって…」
和葉も少し赤くなっている。
「あぁ…その子はこの桜の下で手鞠歌を歌ってたお前や！！」
と言った。
　和葉は赤くなっているが、
「ウソや！！私…平次が京都に行くたびに持ってっとる水晶玉なんて知らんもん！！」
と反論した。
　そんな和葉に、平次は、
「疑い深い奴やなー…あれはお前がいた所の下に落ちてたから俺が勘違いしただけでホンマは源氏蛍に盗まれた薬師如来の白毫や！！」
と呆れて言った。
「そうやったんや…」
「あぁ、全くアホやなー…」
と平次に言われて、
「何やて！！」
と和葉が応戦しようとした時、
「まあ…それ以上に俺がアホなんやけどな…」
と平次が言った。
「…へ？」
平次の突然の言葉に和葉が気を取られているなか、平次は話を続けた。
「前…俺…お前が他の男と一緒におるとムカつくのはお前の事子分やと思うとるからやと思うてたけど…今考えれば、あの日、お前を見た時に近い気持ちやったな…そんなに気づかない俺はめっちゃアホや…」
と言った。
「…平次…」
和葉が真っ赤になって何かを言おうとした時、に平次はもっと赤い顔で和葉に向かって呟いた。

「和葉…好きや…」

第１０章　平次キレる（前書き）

ついに完結しました。
久しぶりに新一、蘭、快斗が出て来ます。

第１０章　平次キレる

平次の告白に放心していた和葉だったが、我に返って、
「アタシも…平次の事好き…」
と赤くなって言った。
「和葉…」
平次は和葉を抱き締めようとしたが、
「悪いな…和葉…この続きはまた後でや…」
と言って足元にある長さ１ｍ程の木の棒を拾った。
「へ…平次？」
と和葉が言った時、平次は茂みに向かって、
「オイ！！工藤！！黒羽！！あとネーチャン達居るのは分かってんや！！さっさと出て来んかい！！」
平次のその声に、新一、蘭、快斗、青子は観念したように出て来た。
「…で…どこで分かった？」
新一が聞くと、
「最初からなんか引っかかっとったんやけどな…工藤が暗号ほっぽいてネーチャンと遊びに行ったときからな…」
「やっぱ…不自然だったか…」
快斗が呟いた。
「まあ…証拠は無かったけどな…あん時、お前等が出て来なかったら、茂みに石投げるつもりやったで…ここで隠れられんのはこの茂みしかないからな…」
さらに平次は続けた。
「お前等の行動について俺の推理はこうや…まず、俺が１人で暗号解くように皆で俺から離れたんや…あと、黒羽が去り際に俺の肩を叩いたんは、そん時に俺のポケットから携帯をかすめて代わりに発信機でも付けたんやろな…黒羽は怪盗キッドなんやから簡単にできるはずや…で…和葉の方は中森のネーチャンに発信機持たせておい

たんやろ？和葉と中森のネーチャンは一緒にいたんやし…で、この作戦の司令塔は工藤や！！お前がちっこくなってた時に使うてた発信機と追跡メガネを使うたんやろ？…で、黒羽は工藤に俺の現在地を聞いて先回りして暗号を貼ってたんやろうな…黒羽は変装の達人やから出くわしても俺に気付かれんしな…で、さっき山能寺の前でぶつかった男は黒羽やろ？あん時に携帯を落としたんは俺やのうて黒羽やったんや気にして見とらんとどっちが落としたんか分からへんからな…で…俺と和葉をまんまと呼び出して、和葉に俺の思い出を話させて告白するように仕向けたんやろ？…ちなみにこの作戦の言い出しっぺはネーチャン達のどっちかやろうけど、俺の初恋を利用しようと仕向けたんは工藤やな…工藤しか俺の初恋の子を見た場所とその子が和葉やっちゅう事知らんからな…工藤…黒羽…なんか言い残す事あるんなら言うてみ…」

平次は木の棒を構えた。

新一と快斗は平次を落ち着かせようと、

「…落ち着け服部！…お前…殺人犯の目してるぞ…」

「平次…落ち着いて物事考えないと後で痛い目見るぞ…」

と言ったが、

「問答無用やあああぁぁぁぁぁ！！！」

と平次が棒を振り下ろし、間一髪2人はかわしたが、

「まて！！コラアアアァァァ！！」

と追って来る平次から逃げていた。

そんな3人の姿を彼等の彼女達は面白そうに見ていた。

和葉は4人の事を怒っていないらしく、蘭と青子と一緒に逃げ惑う新一と快斗やその2人を追う平次を笑いながら見ていた。

数分後、山能寺に2人の男の悲鳴が響き渡った。

(END)

第１０章　平次キレる（後書き）

なんか…暗号が無理やりですみませんでした…。
前作の「破れない約束」の続きとして書いたのですが…このシリーズで今回から春夏秋冬との出来事としてやっていきたいです。今回のが「春」でまた今度「夏」編を書きたいと思っています。

おまけ　一時の平和（前書き）

これは前から書こうと思っていて忘れていたのを今書きました。
これは快斗が和葉に平次のふりをして電話したり青子を呼び出したりしている頃の新一と蘭の風景です。

おまけ　一時の平和

『服部&和葉ちゃんラブラブ大作戦』の最後の1時間、新一と蘭は山能寺で待機していた。
新一は追跡メガネを付けて平次と和葉それぞれの現在地を確認した。
「…そろそろだな…」
と新一は呟いて、自分のDBバッチで、この作戦のためにあらかじめ快斗に渡したDBバッチで快斗に連絡した。
「…黒羽…そろそろ和葉ちゃんと青子ちゃんに電話よろしく…」
『了解！！ほな行くで！！』
快斗は平次の声で答えた。「…今…服部の声をやるなよな…」
と新一が文句を言うと、
『悪い悪い…じゃあ…後は任せとけ』
と快斗は自分の声で言って、通信を止めた。
通信が終わって新一が一息つくと、蘭がクスッと笑った。
「…何だよ？…」
新一が怪訝そうに聞くと蘭は微笑みながら、
「だって新一…メガネかけてそのバッチで誰かと交信してるとコナン君がそのまま大きくなったみたいで…」
と答えた。
その答に新一も吹き出して、
「確かに…俺がコナンのまま時間が経って10年したらこうなるだろうな…このメガネだってコナンの時に使ってたやつだし…けど、コナンだったら俺が交信してたのは黒羽じゃないな…」
と答えた。
「そうだね…コナン君のままだったら今交信してるのは哀ちゃんか歩美ちゃんか元太君か光彦君だろうね…それに、この作戦だって今言った誰かの恋の事かもね…」

と蘭が笑いながら言うと、新一は
「あぁ…それに今の俺はその場合のコナンと完全に違う所があるぜ…分かるか蘭？」
と悪戯を思いついた子供のような表示で蘭に聞いた。
「うーん…ここが京都って事？」
と蘭が答えたが、新一は嬉しそうに、
「違うぜ…」
と答えた。
蘭が少し怒って
「じゃあ何なのよ！」
と聞くと新一は得意気な顔で、
「隣に蘭がいる事だもし今が１０年後で俺がコナンのままだったら蘭は今俺の隣にいないはずだ…」
と答えを教えた。
その答えを聞いた蘭は赤くなって小さな声で、
「…バカ…」
と言った。

この数分後、新一と快斗は平次に作戦がバレて逆鱗に触れたのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9491h/

思い出の桜

2010年10月9日18時14分発行